



# 若妻柔肌 レッスン

庵乃音人

挿絵／ズンダレぼん

立ち読み版

KTC  
KILL TIME COMMUNICATION



Contents

目次

プロローグ お姉ちゃん、僕いけないことしそう……	4
第一章 未亡人のふしだらな誘惑	15
第二章 新妻従姉との禁断の寝室	46
第三章 ママの大親友は妖艶熟女	90
第四章 美女たちの恥ずかしい欲望	132
第五章 年上美獣たちの淫らな狂宴	187
エピローグ 甘くエッチな共同生活	246

## 登場人物

Characters

### 工藤遊兵

(くどうゆうへい)

名門私立進学校に通う16歳の少年。父方の従姉の新婚家庭で居候をしている。

### 宮崎香帆里

(みやざきかほり)

遊兵の居候先の新婚ほやほやの若妻。夫が急な海外出張で出かけてしまったため、遊兵と二人暮らしをしている。趣味は読書。

### 濱野キリカ

(はまのきりか)

遊兵が家庭教師をしている女の子の母親で、デザイナー。明るく洗刺とした未亡人。

### 敷島沙耶子

(しきしまさやこ)

遊兵の亡き母の親友にして、幼いころ可愛がってもらった妖艶な独身美女。広告プランナーとして海外で活躍中。

そつと目を開くと、超至近距離にキリカの小さな顔があった。左右の頬がえぐられるように窪み、鼻の下の皮がいやらしく伸びている。端整でクールな顔立ちが、大きく口を開けたせいで凄艶に崩れるその眺めが遊兵の恥悦を刺激した。

「キリカさん。すごいキス。ちんちん疼いちゃう」

「はあはあ。お返しよ。先生の口、もつとしごいてあげる」

キリカは少年の舌を、窄めた唇でいきなり締めつけた。あつと驚く暇もない。そのまま前後に顔を振ると、少年の舌を唇でしごきつつ、自分の舌を擦りつけてくる。

（うわあ、何これ。気持ちいい。た、たまらない）

搦め捕られた舌が甘酸っぱく疼き、淫らな高揚感が全身をさらなる恥悦で茹であげていく。遊兵は火照った身体に淫らな力が際限なく膨張するのを感じながら、豊熟痴女のもう一方の足も抱え上げた。キリカの両足は完全に宙に浮いた。

「むはあ、先生。ちゅぱ」

美脚の膝裏に手を差し入れて未亡人をM字状に拘束したまま、前後に腰を振って蜜壺の中を乱暴に掻き回す。もちろん両手は乳搾りのようにしてたわわな巨乳を揉みこねながらだ。キリカは彼にしがみつき、動きを合わせて自らも腰を振る。

「キリカさん。気持ちいい。ちんちんとろけちゃう」

「ああ、感じちゃう。すごくいいの。せ、先生」

キリカは少年から唇を離すと、色っぽい目で彼を見た。興奮しすぎてはあはあと肩で喘いでいる。そんな彼女に、思わず遊兵は「キリカさん？」と聞いた。

「んふう……先生を奪われちゃうって思ったら、あたし……すごく興奮しちゃって」媚びを滲ませた哀切な声だった。年上の美女が恥を忍んで口にする可愛い焼きもちに、遊兵は何とも甘酸っぱい、喜びと申し訳なさが半分ずつのような気持ちになる。

「心配しないで。奪ったりしないから」

その時、突然頭上から声がした。

キリカはぎくつと身体を震わせ、慌ててプールサイドを仰ぎ見る。「あつ」とその口が驚きの声を発したまま固まった。遊兵も慌てて背後をふり返る。

「さ、沙耶子おばさん」

そこには片手を腰に当て、セクシーなポーズで立つ妖艶な小母の姿があった。

乳白色の美肌だった。息を呑むほど艶やかな豊熟の女体が、エロチックな黒い水着に包装されている。いや、違う——沙耶子が身につけているのは水着ではなかった。

下着だ。セクシーで露出度満点の、布面積の少ないビキニブラとショーツ。ブラジャーはハーフカップ型で、零れるような巨乳の先端を薄い布が申し訳程度に覆ってい

る。しかも素材はシースルー。黒い布越しに痾りきった乳首が透け見えていた。

同じようにショーツも透け透けのシースルーで、秘めやかな恥毛の繁茂がうっすらと見えている。こんもりと柔らかさそうに盛り上がる股間の眺めがたまらなかつた。

「ふふっ。どう、遊兵君。おばさんも、まだまだいけそうかしら」

モデルのようにポーズを決め、妖艶に微笑んだ。たっぷりと張りつめた豊臀を右へ左へとこれ見よがしに振り、身体に水をかけてプールに入ってくる。

「し、敷島さん。あの……」

何しろ、こともあろうに一つに繋がりに、腰を振りあつてるところを目撃されてしまったのだ。しかもかなり下品な格好で。キリカの狼狽ぶりは察するにあまりあつたし、それは遊兵だつて同じだった。だが沙耶子はどこ吹く風である。

「沙耶子さんでいいわ。ソフ、キリカさん、心配しないで」

完熟の美女は硬直する二人に近づくと秘めやかな囁き声で言い、その手を未亡人の尻の谷間にやった。「ひいい」とキリカの艶めかしい悲鳴が跳ね上がる。

「やだ、沙耶子さん。そこは、お尻の穴。あん、だめええ」

「ふふっ。どうしてだめなの？」

沙耶子は細めた瞳に淫らな高揚感を滲ませ、キリカの尻の底に埋めた爪で繊細な肛

肉を優しく搔いた。

「ふわぁ。なにするんです。沙耶子さん。搔かないで。お尻の穴なんて。ああ」

卑猥さを剥き出しにして自分を責め始めた沙耶子の蛮行に、キリカはクールな美貌を引きつらせて動揺した。少年の身体に、さつきまで以上の熱烈さでしがみつく。

彼女が沙耶子の蛮行に対して感じているのが必ずしも嫌悪感だけではないらしいのは、ペニスを絞りこんでくる蜜壺のせつない動きで分かった。

「くああ。キリカさん。オマ○コがちんちん絞ってる。ふはぁ」

「いやぁ。そんなつもりないのに。あつあつ。沙耶子さん。やめて」

「遊兵くん。ほら、おちんちん動かして。早く」

沙耶子に煽られ、遊兵は慌てて腰の動きを再開させた。美しい未亡人の淫肉は、動きを止める前よりさらに豊潤な潤みに満ち、ペニスを抜き差しするとそれに応えるように猥褻な蠕動を繰り返す。

「キリカさん……うああ、オマ○コ、さつきまでよりもつといい」

遊兵は自分にしがみついてくる未亡人の異様な体熱におののきながら、狂ったように腰を振った。熱したコンニャクみたいな巨乳が、彼の胸板を何度も押し返す。痾つた乳首に肉肌をえぐられ、炭火を押しつけられたような激感を覚えた。

「だ、だって。お尻の穴、沙耶子さんに搔かれちゃって。はふう」

キリカは今にも泣きそうな声になり、遊兵の首筋に顔を埋めていやいやと首を振る。「んふ。搔いてるんじゃないわ。ほじってるの。お尻の穴、ほじってるのよ」

妖艶な美熟女は、いやらしく発情した鬨るような視線をキリカの横顔に注ぎ、ずらした水着の脇から彼女のアナルをソフトに掘削した。

「ほじられちゃってる。恥ずかしい。お尻の穴。いやあ」

「キリカさん。わたしも興奮しちゃう。んふう」

年下の美女を虐めることで肉悦が膨張してきたらしい沙耶子は、紅潮した美貌をキリカの横顔にくつつける。下品な音を立てて彼女の耳朶を舐めた。

「ぴちゃ。ちゅう。キリカさん。この可愛い男の子シエアしない？」

耳の穴を舐め、唾液でドロドロにしながら沙耶子はキリカに囁く。

「はうっ。シエ、シエア？ 沙耶子、さん。むふう」

茹だるような興奮のせいで美麗な瞳をどろりと濁らせ、キリカは沙耶子を見た。手<sup>て</sup>練<sup>だ</sup>れの熟女はすかさず、そんな未亡人の唇を奪う。

「そうよ。ちゅぱ。独り占めするにはもったいなさすぎるもの、この子」

キリカの口をちゅうちゅうと吸いながら、沙耶子は遊兵に流し目を送った。



（おばさん。何てセクシーな視線）

美しい小母の熱視線を至近距離で浴び、少年は血液が煮立つような興奮を覚えた。そんな自分の淫悦を、彼は熱烈な腰の動きを通じて未亡人のぬめりに叩きこむ。せつない責めで淫肉をえぐられるキリカの口から「あはあ」と歓喜の悲鳴が爆ぜた。

「どう？ いろいろな意味でほんとのパートナーにならない？ わたしたちなら、きつとできるわ」

「はああ。さ、沙耶子さん。あたし……あつ、くふう……」

未亡人は沙耶子の言葉に哀切な吐息で応え、自らも年上美女の唇を求める。

「ちゅぱ。ああ、感じる。先生のちんちん、子宮に当たる。やあん、お尻の穴も感じちやう。ほじられて……あはあ……」

沙耶子の白い人差し指は、第一関節のあたりまでキリカの肛肉に埋まっていた。彼女は未亡人と糸を引くような接吻を交わしつつ、人差し指を右へ左へ回転させる。「ひゃあ」とキリカのけたたましい媚声が跳ね上がった。

「ぢゅぷ。いやらしいアナル。わたしの指を食い締めてヒクヒクしてる」

「沙耶子さん。ほじられて気持ちいいの。お尻の穴、ヒクヒクしちやう。んはあ、オマ○コも気持ちいい。おかしくなっちゃう」

二人の熟女は淫らな高揚感に全身を麻痺させ、一気に昂ぶっていく。彼女たちに煽られるように、遊兵も両足を踏ん張って腰をくねらせ、キリカの蜜肉の中を肉槍で掘削し続けた。ふと見れば、沙耶子はキリカを責め立てつつ、水着のクロッチをずらし、自分の指でクリトリスを愛撫していた。

「お、おばさん。いやらしい。オナニーしてるの。はあぁ」

「遊兵くん、おばさんも感じちゃう。あなたも、キリカさんも可愛くて」

沙耶子の熟れた女体を、淫らな激情が妖しく蝕む。麻薬のような興奮に身も心も完全に呪縛された美熟女は、尻を後ろに突き出したり、両足をがに股のように開いて腰を上げたり下げたりしながら、ぷっくりと勃起した股間の肉芽を愛撫した。

キリカの尻の穴に突き入れた指はさらにぬふぬふと排泄粘膜の中に埋まり、なおも右へ左へ回転する。「あふうあぁ」と未亡人の喜悦の嬌声が跳ね上がった。

「感じちゃう。お尻の中、掻き回さないで。沙耶子さん、痺れるう」

沙耶子はそんなキリカの唇を夢中になって吸った。

「キリカさん、気持ちよくなって。わたしもいいの。イッチャいそう」

言いながら、未亡人のアナルの中をなおも指で掻き回し、もう一方の手で自分のクリトリスを掻き搔るように愛撫する。キリカは「おおお」と獣のような声をあげ、遊



兵にしがみついたまま狂ったように腰を振った。

「ぐわああ。イク。キリカさん、射精しちゃう。気持ちいい」

遊兵はもうたまらなかつた。ぬめる窮屈な牝肉と亀頭の出っ張りが擦れあい、しばらくのような快感が閃く。どんなにこらえようとしても確実に我慢の限界だ。

「先生。あたしももうだめ。イッチャウ」

二人は互いに動きを合わせ、自分の股間を相手に叩きつけた。派手な反復運動のせいでプールの水がリズムミカルに揺れ、無数の飛沫しぶきが跳ね上がる。擦りつけられるたわわな乳房が遊兵の胸板と擦れあつて形を変え、勢いあまつて水の中から飛び出してはぺたんぺたん派手に水を叩く。

(乳首が胸に擦れて、き、気持ちいい。おっぱい、こんなに暴れてる)

「はああ。わたしもイッチャウ。二人と一緒に」

絶頂一步手前なのは、沙耶子も同じだった。著名な淑女とも思えぬ卑猥さで両足を開き、腰を落したり元に戻したりしながらネチッこい手つきでクリトリスを掻き雀る。とめどなく湧き上がる快感は、キリカの肛肉をほじるサディスティックな動きとなり、悩乱する未亡人の恥悦をさらに炙った。

「沙耶子さん、お尻の穴気持ちいい。先生、イッチャウ」



「はあぁん。ちんちん刺さってる。おばさんのオマ○コに。あん、すごくいいわ」

二人は喜悅の声を漏らした。沙耶子は少年の爪先に向かってうつつぶせになり、両足で腰を挟むようにする。完熟の尻桃が、遊兵に向かって突き出される格好になった。

沙耶子は興奮した声を零しながら上下に腰を動かし、肉棒の抜き差しを始める。いやらしい粘着音がヌチャヌチャと秘めやかに響いた。

「刺さってる。奥まで来るの。子宮に当たってる。はあぁ」

「き、気持ちよすぎちゃう。沙耶子おばさん」

熟れきった美女は、次第に腰の上下動を加速させながらケダモノじみた声をあげた。少年のふくらはぎのあたりに顔を埋め、背筋をたわめた卑猥な格好で夢中になって尻を跳ね上げ、性器の擦りあいには耽溺する。今までよりひとときわ派手な音で、ぎゅるつと腹が鳴った。沙耶子がまたも「はあぁ」と艶めかしくよがる。

「鳥肌立つちゃう。うんちしたくて。我慢しながらおちんちんにオマ○コ擦りつけるとすごくいいの。いやらしい汁いっぱい出ちゃうう」

相当な気持ちよさなのだろう。美熟女は取り乱した声をあげ、ふしだらな肉悅に溺れた。色白の肉肌が湯上がりのような薄桃色に染まり、毛穴という毛穴から汗が噴き出して全裸の女体をいやらしくぬめ光らせる。

「はあはあ。沙耶子さん、気持ちよさそう。香帆里さんも。あたし興奮しちゃう」

遊兵の身体の横に膝立ちになったキリカは、再び妖しい発情を始めた肉体を持ってあまし、クネクネとエロチックにくねらせながら二人の女の尻を揉んだ。

「やん、やめて。お尻揉まないで。刺激されて出ちゃうう」

香帆里が我を忘れた声をあげる。禁忌な疼きに耐えかねたように腰をくねらせ、さらに熱烈に自分の秘割れを少年の顔面に擦りつけた。遊兵の顔は、可憐な従姉の蜜穴から溢れ出した淫猥な汁で濡れ濡れになっていた。両手の指で野苺のような乳首をコロコロと廻りながら、めつたやたらに舌を踊らせ、香帆里の牝肉を蹂躪する。

「やん、気持ちいい。遊ちゃん、感じちゃう。困るよお」

今度は香帆里の腹が、沙耶子に負けじとぐるつと鳴った。

三人の美女たちが、揃いも揃って狂おしい便意と戦いながら卑猥な行為に溺れているかと思うと、遊兵は燃え上がる肉欲をどうすることもできない。

「お姉ちゃん。沙耶子おばさん」

少年は舌で香帆里の蜜肉を、両手で彼女の乳芽を廻りつつ、上下に腰を動かして沙耶子の恥肉と獣茎を擦りあわせた。二人の美女の喉から恥悦に溺れきった悩ましい嬌声が弾ける。お漏らしでもしたみたいに新たな愛液が溢れ出し、遊兵の顔面と股間を

びしよ濡れにした。沙耶子は髪を振り乱し、背後のキリカにねだる。

「キリカさん。お願い、栓抜いてお尻に指入れて。いっぱい搔き回してほしいの」

「沙耶子さん、してあげるわ。ああ、いやらしい。香帆里さんにもしてあげる」

「やだ。キリカさん。そんなことされたら。ああ」

二人に負けないぐらい淫らに興奮したキリカは、沙耶子のいやらしすぎるおねだりを嬉々として快諾した。まずは沙耶子の肛肉から、続いて香帆里のアナルから立て続けにプラグを抜く。左右の人差し指をプスリと二人の菊門に突き立てた。

「ひやはあ」

美熟女と若妻の唇から、同時にけたたましい嬌声があがる。その悩乱しきった声に煽られるように、未亡人は両手を巧みに動かして二人の肛肉の中をほじり始めた。

「ああ。やだ、すごくいい。お尻の中ほじられて。いっぱい感じちゃう」

沙耶子は興奮した声をあげ、いつそう淫らな腰遣いで膣壁の凹凸を遊兵の肉傘に擦りつけてくる。強烈な酸味が陰茎からしぶくように爆ぜ、彼の全身を鳥肌だらけにした。淫らな劣情が高まった少年は激しく腰を振り、小母のワレメを突き上げる。

「気持ちいい。ちんちん子宮に当たってる。あん、いやあ。子宮に当たるたびに、うんちしたくなっちゃう」



小母の媚声と尻肉が淫らに跳ね踊った。遊兵は猛る肉杭を美熟女の秘割れに叩きこみ、性器と性器をより深い部分まで擦りあわせる。亀頭の先に当たる柔らかな肉が子宮なのだろう。彼の鈴口は餅でもつくように、子宮口をヌチャヌチャと揉みつぶした。そうしながら香帆里の牝貝を舌で執拗に舐め、指で抓つまんだ二つの乳勃起をおもむるに引つ張る。

「やだ、伸ばさないで。乳首伸ばされてる。痺れちゃう。ああ」

茹だるような興奮で全身を沸騰させた香帆里は、毛穴から大量の汗を噴き出させた。全裸の女体が、ローションでも塗ったようにぬめぬめと艶光りする。双子の乳房は乳首を引つ張られ、釣り鐘のように変形した。桜色の乳首は、まるでサラミスティックだ。下品に伸張した乳勃起が、遊兵の指に抓つままれたまま小刻みに震える。

「んひい。やん、お尻の穴掻き回されて。だめ。我慢できなくなっちゃう」

香帆里は叫び、さらにいやらしく尻を振った。キリカはそんな彼女のアナルに埋めた指を容赦なく抽送させ、新妻の禁忌な排泄衝動をさらに煽る。

「香帆里さん、可愛いわ。ああ、沙耶子さんたら、なんていやらしいカッコ」

両手の指で二人の美女の菊蕾を掘削しながら、小麦色の肌をした未亡人は左右の太ももを盛んに擦りあわせた。彼女自身もまた、壮絶な排泄本能と麻薬のような興奮状

態を極限近くまでヒートさせていた。

「キ、キリカさん」

「先生、興奮しちゃう。こうやって太もも擦りあわせると、オマ○コクチュクチュして気持ちいいの。うんちしたくてゾクゾクしちゃう」

キリカはそう言い、美女たちを責め廻る指の動きを加速させた。三人の美女は互いに競いあうように、ぐるる、ぐるると不穏な腹鳴を響かせる。

「ああ、たまらない。子宮が。おちんちん。お尻の穴。ひい。うんちが。子宮いい。うんち出そうで。はふう。興奮しちゃう」

沙耶子は劫火のような肉悦に完全に酩酊し、支離滅裂な歓喜の雄叫びをほとばしらせた。狂ったように、尻肉が上下にバウンドする。ミッシリと脂肪の詰まった大きな尻が弾むたび、肉が震え、太ももまでもが派手に揺れた。キリカの指を食い締めた肛肉が締まり、同時に少年のペニスもぬめる淫肉で思いきり締めつけられる。

「気持ちいい。出ちゃう。射精しちゃう」

膣奥深く突きこむたびに亀頭を愛撫し、艶めかしく包みこむ子宮の感触に恍惚としながら、遊兵は射精衝動を膨張させた。腰の動きをさらに激しくし、下品な蜜を溢れかえらせる美熟女の恥溝を肉杭で掘削する。舌で香帆里の淫肉を猛然と舐めまくり、

乳房を改めて掴み直してサディスティックに揉みこねた。

「はああ。遊兵さん。あん、みんないやらしい。はああ」

少年とリズムを合わせるように、キリカも両手の指の出し入れを加速させ、後ろに尻を突き出して太ももを淫らに擦りあわせた。

その動きのせいで股間の肉裂が圧迫され、淫らな粘着音を立てて変形する。白濁した愛蜜と、さきほど彼が射精した精液がヌヂユウツと溢れ出し、生臭い栗の花のような匂いを漂わせながら卑猥な泡を無数に作り出す。

「やん、遊ちゃん、激しい。キリカさん、ほじらないで。そんなにお尻ほじったら、我慢できなくなっちゃう。んふう、でも感じちゃう」

汗まみれになった全身を艶めかしくぬめ光らせながら、香帆里は狼狽と恍惚が一つになった叫び声をほとばしらせた。禁忌な気持ちよさが火照った女体を蝕むのだろう。遊兵の顔に密着した恥肉が蠕動し、二枚のラビアが蠢いて彼の舌を締めつけたり解放したりする。こぼりとエロチックな音を立てて新たな蜜が噴きこぼれ、少年の鼻の穴を直撃した。彼は異様な息苦しさかられつつ肉の欲望に身を焦がし、舌で、手で、ペニスで、ありつたけの卑猥な反復運動を繰り返す。

「はうう。キリカさん、もつとほじって。うんち我慢するとすごくいい。子宮にズン

ズンおちんちん当たって。もう、たまらないの」

沙耶子にも絶頂の瞬間が近づいているらしかった。卑語を喚きまくる浅ましい痴女と化した小母は完熟の肢体を汗で光らせ、肉を震わせて猥褻な尻肉の上下動を続ける。少年の肉棒を飲みこんだ彼女のワレメからも、まるで失禁でもしたかのように、白濁した淫蜜がとめどなく溢れ出していた。

「ああ。ああ」

全裸の汗だく美女たちの唇から、そこはかとない狂気すら滲ませた淫らな声がほとばしり、恥悦の三重奏を奏でる。三人のお腹が激しく鳴り、切迫した息遣いと、少年が香帆里のワレメを舐める淫靡な音、沙耶子の肉割れに股間を叩きつける生々しい爆ぜ音までもが重なった。むんと香り立つ、甘ったるく濃密な汗の匂い。恥悦の汁の匂い。昼下がりのリビングは、妖艶な異臭漂うちよつとした肉悦地獄の様相を呈する。

「むはあ。もうダメだ。我慢できない。おばさん、射精する」

いよいよ我慢の限界だった。遊兵は狂ったように腰を振り、爆発間近の淫欲ペニスを猛然と抜き差しした。しぶくように、沙耶子の秘割れから愛蜜が四散する。

「はひゃあ。遊ちゃあああん」

ブデユッと溢れ出した香帆里の愛液が目飛びこみ、視界が完全に溶解する。彼女



撃ち尽くした。どろり——収まりきらなかった精液が逆流し、性器と性器の隙間から溢れ出す。淫らな空気で澱みきった室内に、四人の荒い息遣いだけが交錯した。

だが、そんな空気をすぐに一掃した女がいた。

「はぁはぁ。遊ちゃん。やだ、お姉ちゃん、つらい。もう我慢できない」

香帆里である。彼女は力尽きたように身体を投げ出してうつぶせになったが、決して体力が限界を迎えたわけではなかった。むしろその逆だ。ちょうど沙耶子と似たような格好でリビングの床にうつぶせになった新妻は自ら腰を動かし、少年の顔面にぬめる秘割れをさらにネチネチと擦りつけた。

「ふはぁ。お、お姉ちゃん」と少年は驚きの声をあげる。

（お姉ちゃん。自分からこんなにいやらしく腰を動かして興奮してる）

「遊ちゃん。お姉ちゃんもうだめ。耐えられない。エッチしたいの」

可憐な若妻は耐えに耐えたせつない想いをさらけ出すような声で少年に訴えた。そのアナルにはなおもキリカの指が埋まったままだ。クールな未亡人は、沙耶子の肛肉からはちゅぽんと指を抜き、アナルプラグで元通り栓をした。

恥悦を極め尽くした美熟女は「ふはぁ」と色っぽい声を漏らす。腹を鳴らしながらよろよろと起き上がると、少年の身体から汗まみれの女体を剥がした。

「んふふ、香帆里ちゃん。あらあら、すごく興奮してる。まあ、いやらしいがに股興奮した声で言うのと、まん丸に張りつめた香帆里の尻肉を掴み、その谷間を開いたり閉じたりするように揉みこねた。

「あん、だめ。やめてください。そんなことしたらほんとに出ちゃう」

香帆里は淫らな媚声を跳ね上がらせた。

「ふふっ。でもそれがたまらないんですよ。病みつきになるわよ」

沙耶子は愉快そうに言い、健康的に張りつめた香帆里の桃尻を割ったり元に戻したりする。それに合わせ、再びキリカは新妻の肛肉に埋めた指をそろそろと抜き差しし始めた。「ひいひい」と香帆里の色っぽい悲鳴が爆ぜる。

「出ちゃう。いや、やめて」

「何が出るの。ちゃんとおっしやい」

サドっぽい笑みを浮かべながら、美熟女はネチッこい手つきで香帆里の尻をまさぐった。キリカは「ああ、興奮しちゃう」と悶え、少しずつ指ピストンを激しくする。

香帆里の腹がぎゅるつと鳴り、それに呼応するように、彼女を責める美女たちの腹も切迫した音を響かせた。少年は従姉の股間から顔を抜き、床に起き上がる。

「さあ、香帆里さん。ちゃんと言わないと、ここで指抜いちゃうんだから」

皺々の菊蕾の中で指を入れたり出したりしながら未亡人が言う。

香帆里は「いやあ。抜いたら漏れちゃう。見られちゃう。恥ずかしい姿、遊ちゃんに」と引きつった悲鳴を漏らし、激しくかぶりを振った。

「だったら言うのよ、香帆里ちゃん。ほら、何が出ちゃうの」

妖艶な熟女は語調を強めて若妻に聞いた。「抜いちゃおうかしら」とキリカが煽る。

「いやあ。漏れちゃう」

「何が。さあ、おっしゃい」と沙耶子がひとときわ激しい口調で叫んだ。

「ああ、恥ずかしい。うんちが漏れちゃうの」

とうとう香帆里が叫んだ。悲鳴に近い声だった。遊兵は彼女の言葉を聞き、全身が焼け焦げるような激感を覚える。わなわなと四肢が痙攣した。

「うんち漏れちゃうのね。ねえ、どこから？」とさらに沙耶子が煽る。

「ひい。お尻の穴からいっばい出ちゃう。遊ちゃんに見られちゃう」

「お、お姉ちゃん」

今度は遊兵が叫ぶ番だった。たった今二度目の射精をしたばかりだというのに、いったん萎しおれかけたペニスがまたもむくむくと膨張する。気がつけば彼は片手に陰茎を握りしめ、しこしことしごきながら、はしたない淫語を叫ぶ従姉を見ていた。



「お願い、お尻ほじらないで。遊ちゃん。エッチしょ」

香帆里は哀切な声で背後の遊兵に訴えた。少年はもうたまらなかつた。

「入りたい。僕もお姉ちゃんと一つになりたい。ねえ、おばさん、いいでしょ」

すると沙耶子は「それは香帆里ちゃん次第ね」と微笑み、なおも尻肉をいやらしい手つきで揉みこねた。二つの桃尻を動かして、谷間を開いたり閉じたりする。

「ひいい。漏れちゃう。お願い、せつないの」

「どう、香帆里ちゃん。みんなで遊兵くんをシェアできる？ 一緒にこの子を立派な男性に育てていける？」

美熟女は聞いた。恥悦まみれの美貌に、ほんの一瞬だけ真摯な気配がかいま見えた気がしたのは、少年の気のせいだったろうか。

「ああ、沙耶子さん。うんちが」

「答えて。一緒に遊兵くんを育ててくれる？」

重ねて沙耶子がそう聞くと、若妻はひゆるると喉を鳴らした。

「そ、育てます。もう独り占めしたいなんて思わない。約束します」

その言葉を聞き、ようやく美熟女は「いいわ」と満足げに微笑み、遊兵を見る。

「遊兵くん。お姉ちゃんのお尻の穴に入れてみる？」

その言葉を聞き、ペニスをしごいていた少年は「ああ」と溜息を漏らした。血液が逆流するような興奮を覚える。「まあ、それ素敵」とキリカも声を震わせた。

「いや。それだけは。お尻の穴なんて。だつてそこは」

ただ一人、香帆里だけが狼狽した声をうわずらせる。だが淫らな欲望の虜になってしまった少年の劣情は、もう誰にも止められなかった。

「入りたい。お姉ちゃんのケツの穴に」

遊兵は香帆里と自分だけに分かる特別な卑語を叫びながら、四つん這いになった愛しい従姉の背後ににじり寄る。「まあ、ワイルド」とキリカが感激したように呻く。

「キリカさん。指抜いて。遊兵くん、すぐに入れるのよ」

沙耶子はそう言つて未亡人にうなずいた。少年は立ち上がる。キリカは「ああ、興奮しちゃう」と身体を震わせ、香帆里のアナルから指を抜いた。

「ああ、漏れちゃう」

「お姉ちゃん」

猛烈な興奮を覚えながらに股に腰を落とし、艶めかしくひくつく皺々のアナルに亀頭を押しつけた。「はあ」と香帆里の凄艶な声が弾ける。遊兵は「香帆里姉ちゃん」と愛しい人の名を叫びながら、荒々しく腰を突き出した。

「あひい。遊ちゃん」

にゅぷじゅ——強烈な圧迫感のあと、少年の陰茎は勢いよく、あの秘めやかな夜に続いて、またも禁忌な排泄孔の中に飛びこんだ。

「ふはあ。だめえ」

遊兵は灼熱の尻壺の中に陰茎を沈めていく。サイズ違いの輪ゴムでペニスを締めつけられるような気持ちよさはあの夜と同じだ。いや、正確に言うならあの夜よりもさらに激しい。しかも薄桃色の窄まりは、休むことなく蠕動を続けていた。

「くああ、お姉ちゃん」

「遊ちゃん。何これ。うそつ。何なのお。ひいい」

香帆里の艶めかしい淫声に煽られるように、遊兵は肉棒の抜き差しを始めた。可憐な嬌声が跳ね上がり、肛肉が肉竿を締めつける。排泄粘膜のぬめりはこの前以上だった。ペニスを入れたり出したりするたびに、ぶつくりと膨らんだ腹が鳴る。

「やだ、お尻の穴気持ちいい。どうして。だめ。うんち我慢しながらお尻の中搔き回されて感じちゃう」

理性を弾けさせ、茹だるような肉欲に取り憑かれた香帆里は、四つん這いのままけたたましい声をあげ、天に向かってさらに肉尻を突き上げる。

「お姉ちゃん。締まる。すごく締まってグニグニしてる」

二度も射精したというのに、遊兵はまたすぐにも達してしまいそうな気持ちよさにおののいた。菌を食いしぱり、卑猥なピストンを繰り返す。

「ああ。お尻の穴痺れちゃうの」と香帆里が叫んだ。

「違うよ、お姉ちゃん。ケツの穴でしょ」

少年はまたあの夜と同じ要求をした。若妻は「ふはあ」と息を乱す。

「ああ、ケツの穴感じちゃう。あの日よりいい。気持ちいいの」

その言葉を聞いた沙耶子とキリカは「まあ、お下劣」とさらに興奮した。

「いやらしいわ。お尻……うん、ケツの穴でエッチするのは、今日が初めてじゃなかったのね」と沙耶子が言えば、キリカも「清纯そうな顔して、香帆里さんドスケベ」と年下の新米妻を言葉で煽る。そんな二人の卑猥な突っ込みに、当の香帆里は——、「ひゃう。ケツの穴最高に感じちゃう。うんちしそうで鳥肌立っちゃう」

とさらに淫らな昂揚感を煽られたように、髪を振り乱して絶叫した。猥褻な淫蜜を溢れかえらせた淫肉が呼吸でもするように拍動し、濃密な白濁粘液を絞り出す。

「はあはあ。いやらしい。もう我慢できないわ」

とキリカが全裸の肢体をわななかせ、ぎゅると腹を鳴らした。未亡人は沸騰する

よような劣情に身を焦がしながら仰向けに寝転がる。四つん這いになった香帆里の下に身体をすべりこませた。派手に揺れ踊る乳房の片方にむしゃぶりつく。ちゅうちゅうと卑猥な音を立てて乳首を吸い、もう乳房を鷲掴みにして揉みつぶすようにまさぐった。

「ひい。キリカさん、感じちゃう。乳首。おっぱい。やん、電気走っちゃう」

キリカの責めに、香帆里は歓喜の叫びをあげていやらしく尻を振る。

「んふう。興奮しちゃう。香帆里さん」

キリカはあまつた片手を自分の股の間にすべらせると、己の肉割れと陰核を五本の指全部を使って愛撫した。両膝を大胆に開き、足の先をくつつけた下半身の形は、まるで「◇」のようだ。下品を絵に描きたいやらしいポーズで秘部を搔き篋り、香帆里の乳房を責め立てるその姿が、遊兵をますます悩乱させる。

「感じてる？ 遊兵くん。最高に幸せ？」

クライマックスに向かって激しく尻を振る遊兵の背後に、汗まみれの沙耶子が火照った身体を密着させた。豊満な乳房を背中に押しつけられ、乳首が肉肌食いこむ。

「沙耶子おばさん」

少年は度を超した激しい昂揚感のせいで頭をぼうつとさせながら、自分を優しく抱きしめる沙耶子に甘えた。美熟女は後ろから身を乗り出し、彼の顔を横に向かせて熱

つぼく口を吸う。

「ちゅぱ。よかったわね、遊兵くん」

「おばさん。僕思出しした」と少年は小声で訴えた。「小さい頃のこと。ママとおばさんと一緒にお風呂に入った日のこと」

すると沙耶子は目を細めて柔和に笑う。「長いこと一人にさせてごめんね」と甘ったるい声で言い、また口を吸った。

「見ててあげる。おばさんここで見ててあげるから、いっぱいちんちん入れたり出したりしよつ。大好きなお姉ちゃんにうんとエッチな声あげさせるのよ」

「ああ、おばさん」

何もかもお見通しなのだ、沙耶子おばさんとは感激しながら、遊兵はさらに激しく腰を振る。「見て。おばさん。ううつ、興奮する」と声を震わせて。

「見るわ。元気なちんちん、香帆里ちゃんのケツの穴を出たり入ったりしてる。分かるわよね、香帆里ちゃん」

沙耶子はぬめる裸体を少年に擦りつけ、彼の髪を撫で、その頬を舌で舐めながら香帆里に聞いた。片手はキリカ同様自分の股間に伸び、どろどろの肉割れをまさぐっている。溢れ出した愛蜜が白い手を濡らし、指と指の隙間から床に垂れ伸びた。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**



# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!  
来かねる場合がございます。い場合、お手数ですが再度お問い合わせください。
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

**VALKYRIE**



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

**cranberry**



<http://www.cran-berry.com/>

**mille-feuille**  
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元  
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!